

中国雲岡石窟における 中心柱窟の展開とその影響

齋 藤 龍 一

はじめに

山西省大同市郊外に位置する雲岡石窟は、北魏和平元年（460）頃に造営が開始された中国を代表する石窟のひとつである。主要な石窟だけでも45窟を数え、その造営年代については、第1期〔和平元年（460）頃一〕、第2期〔皇興4年（471）頃一洛陽遷都（494）頃〕、第3期〔洛陽遷都以降一〕の三期に分期されている¹⁾。

雲岡石窟の石窟形式に着目すると、第1期のいわゆる曇曜五窟がいずれも大仏窟であり、第2期には前室と主室からなる二室形式が現れ、第3期では多くが三壁三龕形式や上下重龕形式の小窟である。そして第2期・第3期に属する第1・2窟、第3窟、第4窟、第5-28窟、第6窟、第11窟、第13-13窟、第39窟の合計9窟がいわゆる中心柱窟である。

中心柱窟とは石窟中央部を方形の柱状に掘り残し、そこに龕を開き造像が配された形式の石窟である。中心柱はストゥーパ（塔）を表現したものとされ、中心柱窟の源流は西インドに分布する、石窟の奥にストゥーパが安置されたチャイティア窟にあると考えられている。一方で石窟中央部を柱状に掘り残す石窟構造については、その先例を西北インド・ガンダーラ地方の中心柱窟に求めることができる²⁾。さらに新疆・クチャ地方ではキジール石窟をはじめとして、亀茲式と称される中心柱窟が分布している。この亀茲式中心柱窟は主室と後室からなり、主室奥壁の左右から後室へ二本の細い通路が通じる、独特な構造をもつ石窟である。

そして西域を除く中国に現存する最古の中心柱窟は、北涼時代に造営され

た河西地方の武威・天梯山石窟第1・4窟と考えられている³⁾。この天梯山石窟を含め河西地方の中心柱窟は西北インドや新疆と異なり、中心柱四面が何層にも区分され数多くの造像が並べられるのを大きな特徴としている。

雲岡石窟の中心柱窟も河西地方のそれと同様に、中心柱四面が数層に区分され造像が配されている。しかし木造建築の瓦葺屋根や柱、垂木、斗栱、人字形割束などを模して浮彫し中心柱全体で木造塔を象る形態は、雲岡石窟に先行する河西地方の石窟ではみられないものである。

この小論では中心柱の形態及び壁面の構成だけでなく、塔形の浮彫装飾といった中心柱窟以外の石窟にみられる建築表現にも着目し、雲岡石窟における中心柱窟の展開を整理すると共に、木造塔が象られる中心柱がどのように出現したのか考察し、あわせて雲岡石窟の中心柱窟から影響を受けたと考えられる周辺の石窟についても言及したい。

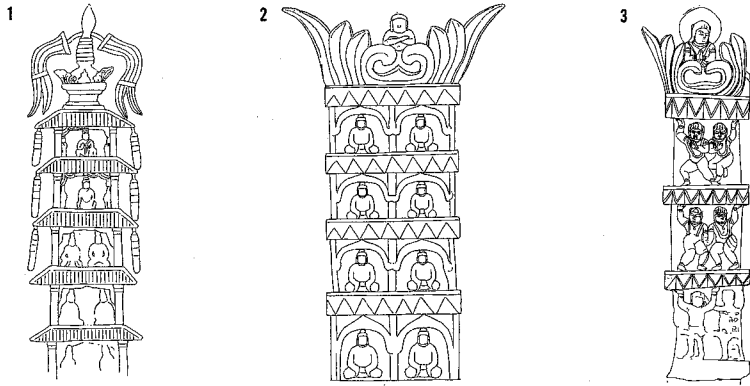
第一章 雲岡石窟にみられる塔形装飾

雲岡石窟では第2期諸窟を中心に、石窟内部の側壁に塔形の浮彫装飾が数多くみられ、また石窟外壁では木造塔を模した巨大な浮彫も確認することができる。これら中心柱と石窟内外の塔形浮彫装飾には、木造塔の表現や内部に配された造像に共通点があり、中心柱窟を考えるにあたり看過することができない。また雲岡石窟の中心柱窟はいずれも第2期後半及び第3期に造営されたと考えられているが、塔形浮彫装飾は第2期諸窟のうち最も早い第7・8窟にみられ、その出現は中心柱窟の造営に先行している。そこで、はじめに塔形浮彫装飾の形態とその配置についてまとめることとする。

①塔形装飾とは

石窟内にみられる塔形の浮彫装飾については、長廣敏雄氏が『大同石窟芸術論』において、次の三種類に分類している⁴⁾。

◇瓦葺木造塔



いわゆる木造の塔で、最上部に刹柱や覆鉢があることが多い（図1）。

◇石造重層塔

あたかも石を積み上げたような形状で、横板には三角文垂飾が線刻される。最上部には刹柱や覆鉢がなく、アカンサスを広げ中央に合掌する半身の人物が表される⁹⁾（図2）。

◇ストーパーバ状塔

単層の塔で上半部は覆鉢形とする。

これらの塔形装飾のうち、中心柱窟とかかわりが深いのが瓦葺木造塔と石造重層塔である。この二種類の塔形装飾はどのように配置され、どのような役割をもって用いられたのであろうか。

②塔形装飾の形態とその配置

それではおよそ石窟の造営順序に従い、塔形浮彫装飾の形態とその配置を明らかにしたい。

(a) 第7・8窟

第7・8窟は共に前室・主室からなる二室形式の石窟であり、それぞれ隣接する両石窟の規模、構造や造像などに共通点が多く同時に造営された双窟と考えられる。

◇瓦葺木造塔

第7窟の外壁東側及び第8窟の外壁西側には、木造塔が象られた浮彫がみられる。風化が進み詳細はわからないが、五層以上の大型瓦葺木造塔を表現したものである。

◇石造重層塔

第7窟の主室東・西壁、第8窟の主室東壁（西壁は崩壊している）の龕と龕の間に配されており、両窟の同位置にあったと考えられる。たとえば第7窟の主室東・西壁第4層及び第8窟の主室東壁第4層にみられる石造重層塔はいずれもほぼ同形で、四層からなり各層には二体の如来坐像が並べられ、最上部はアカンサスを広げ中央に半身の人物が配されている（図2）。

このほか第7窟の門口左右には三層の石造重層塔が配されており、各層には様々な格好をした二体の童子形人物がみられる。そして最上部はアカンサスを広げ中央に合掌する半身の人物が表されている（図3）。

このように第2期諸窟のうち最初に造営された第7・8窟では、瓦葺木造塔は石窟外壁のみにみられ、一方で石造重層塔は石窟内部の龕と龕の間や門口に配されている。

(b) 第9・10窟

第9・10窟は共に二室形式の石窟であり、第7・8窟と同じく双窟と考えられている。

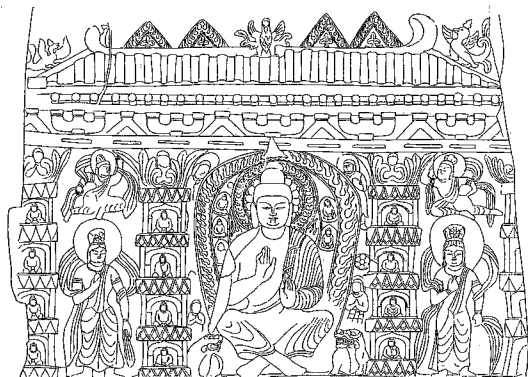
◇瓦葺木造塔

第7・8窟と同様に、第9窟の外壁東側には、五層以上の大型瓦葺木造塔の浮彫がみられる（第10窟の外壁西側は風化が激しく不明である）。

◇石造重層塔

第9窟前室の西壁と第10窟前室の東壁、及び両窟の前室明窓両脇にみられる。このうち前者では、屋形龕を支える柱として用いられている。いずれも四層からなり、各層には如来坐像があつて最上部にはアカンサスと半身の人物が表されている（図4）。

第9・10窟では第7・8窟と同じく外壁には瓦葺木造塔が配され、そして石窟内部には石造重層塔のみがみられることから、二種類の塔形装飾が表さ



れる位置は明確に区分されているといえるだろう。

(c) 第12窟

続く組窟である第11・12・13窟のうち、造営当初の計画通り完成したのは前室と主室からなる二室形式の第12窟のみである。

◇瓦葺木造塔

主室東・西壁第3層の龕と龕の間にそれぞれ一基が浮彫されている。この瓦葺木造塔は三層で各層には一体の如来坐像が配されている。

◇石造重層塔

前室北壁下層の龕と龕の間に、四層の石造重層塔が一基表されている。

第12窟では第7・8窟、第9・10窟と異なり外壁左右に瓦葺木造塔はみられず、前室に石造重層塔、そして主室には瓦葺木造塔が浮彫されている。

(d) 第1・2窟

第1・2窟は共に中心柱窟の双窟であり、塔形装飾に大きな変化が現われている。両窟とも東・西側壁にそれぞれ四龕が並べられ、その龕と龕の間に塔形装飾が浮彫されている。

◇瓦葺木造塔

両窟の東壁にみられ、このうち第2窟東壁の瓦葺木造塔は第四層に交脚像、第五層に倚坐像が配されている。注目されるのは塔上部で、刹柱だけでなく

小さなアカンサスと半身の人物が表されている（図1・5）。なお第1窟東壁は風化が進んでおり、瓦葺木造塔の第五層と三本の刹柱が確認できるのみである。

◇石造重層塔

両窟の西壁にみられ、このうち第1窟西壁の石造重層塔では層内に坐像が配されており、上部にアカンサスと半身の人物が表されている（図6）。また第2窟西壁も風化が進んでいるため、わずかに上部が確認できるのみである。

以上のように第1・2窟では、両窟の東壁に瓦葺木造塔、西壁に石造重層塔が配され、二種類の塔形装飾が東・西側壁で一对に表されている。このように瓦葺木造塔と石造重層塔を対応させて浮彫することは第7・8窟、第9・10窟、第12窟ではみられなかった新しい配置といえる。そして興味深いことにこれまで石造重層塔のみにみられたアカンサスと半身の人物が、かなり縮小されてはいるが瓦葺木造塔の上部にも表されている。さらには瓦葺木造塔には坐像だけではなく交脚像や倚坐像が配されており、層内の尊像が多様化している。

(e) 第5・6窟

第5・6窟は第5窟が大仏窟、第6窟が中心柱窟の石窟形式が異なる双窟である。

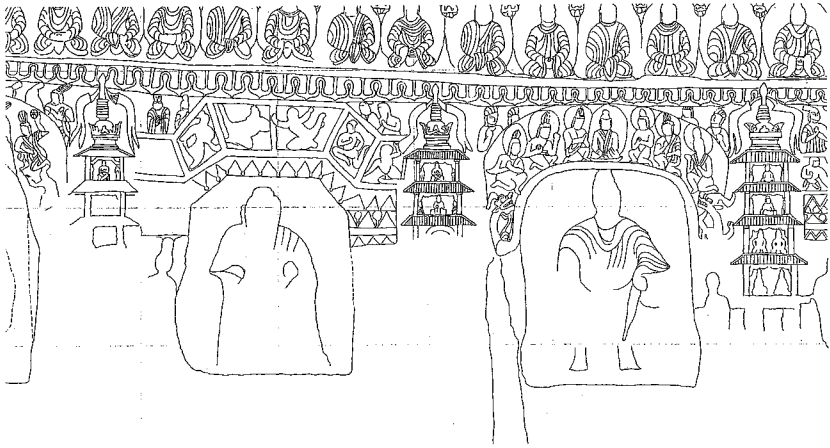
◇瓦葺木造塔

第7・8窟、第9・10窟と同様に外壁にも確認できる。第5窟の外壁東側と第5窟と第6窟の間、及び第6窟の外壁西側に七層以上の大型瓦葺木造塔の浮彫がみられる（図7）。

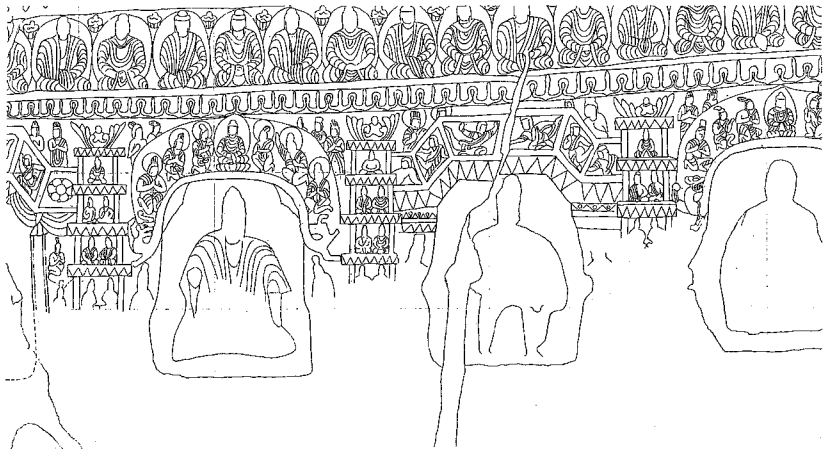
第5窟の石窟内部では明窓の東西両側に、象の背にのせられる一对の五層瓦葺木造塔が配されている。

第6窟では東・西・南の三壁の下層に並ぶ龕と龕の間に、同形の五層瓦葺木造塔が八基浮彫されている。各層には第一層に二体の如来坐像、第2層に菩薩交脚像、第三層から第五層にはそれぞれ一体の如来坐像があり、その左右には脇侍菩薩立像が配されている。そして最上部にはアカンサスと中央の

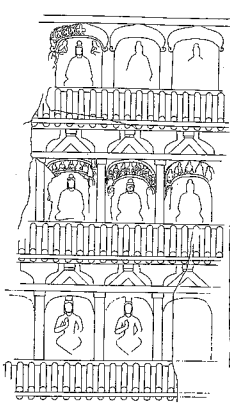
5



6



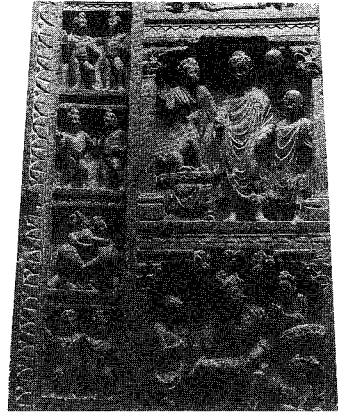
7



8



9



半円からのびる三本の刹柱が表されている（図8）。

このように第5・6窟になると石造重層塔はまったくみられず、瓦葺木造塔のみが表されている。また第2窟と同様に各層内には坐像だけではなく菩薩交脚像や脇侍立像なども配されている。

③塔形装飾の源流

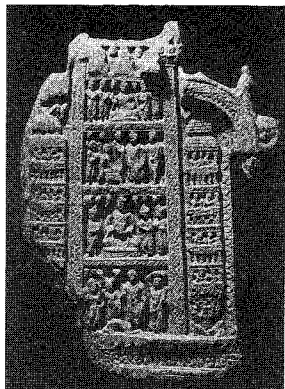
それでは瓦葺木造塔と石造重層塔の二種類の塔形装飾の形態は何にその源流を求めることができるのだろうか。

◇瓦葺木造塔

瓦葺木造塔は文字どおり、木造の多層塔を表したものである。当時の木造塔は現存しないが、山西省や河北省、陝西省、甘肅省などから木造塔が象られた北魏時代の石刻造像が出土しており、おおよそ当時の木造塔のすがたを知ることができる。

◇石造重層塔

長広敏雄氏は石造重層塔について、「相輪もなく、覆鉢もないこの種単純な塔形は、あきらかにストウパや木造重層塔などの造形思想とは無関係に北魏に於いて考案された塔であると考へられる。」と指摘している⁶⁾。しかしながら石造重層塔の龕と龕を区切る役割や屋形龕を支える柱としての役割に



着目すると、これと共通点のある興味深い図像をガンダーラに分布するストゥーパの浮彫にみることができる。たとえば図9にみられるように、仏伝図の脇には縦に連なる区画があり、その層内には様々な格好をした二人の人物が表されている。また図10では仏伝図の両脇に四層の建築があるが、各層内にはやはり二人の人物が配されている。さらには図11のように、アカンサスと半身の人物が表される柱頭を数多くみることができる。このように石造重層塔は北魏（中国）で考案されたものではなく、その源流はガンダーラに求めることができることがわかった。

④塔形装飾の展開

以上、塔形浮彫装飾の形態と配置、その図像的な源流について考察した。瓦葺木造塔と石造重層塔の二種類の塔形装飾は、第二期諸窟にみられるものであり、塔形装飾が出現した第7・8窟、第9・10窟では石窟外部に瓦葺木造塔、石窟内部に石造重層塔を浮彫し、表される位置が明確に区別されていた。続く第12窟はそれまでと異なり二種類の塔形装飾が石窟の前室と主室に表されており、はじめて石窟内に瓦葺木造塔が表された。さらに最も大きな変化は第1・2窟で起り、両窟では二種類の塔形装飾が東・西壁で対応させて浮彫されている。また瓦葺木造塔の内部には交脚像など坐像以外の尊像も

はじめてみられた。そして第5・6窟では石造重層塔が消滅し、瓦葺木造塔のみが表されている。そして小龕などを除き、第5・6窟以降の石窟ではこれらの塔形装飾はみられなくなった。

以上のように瓦葺木造塔が次第に石窟外部から内部へと入り、石造重層塔を圧倒していくという塔形装飾の展開が明らかとなった。これをふまえ中心柱窟について論を進めることとする。

第二章 雲岡石窟における中心柱窟の展開

雲岡石窟の中心柱窟は9窟を数える。ここでは石窟の基本的な粗掘り工程のみで造営が中止された第3窟、第4窟、第13-13窟を除く6窟について、おおよその造営順序に従い考察を進める。

①第11窟

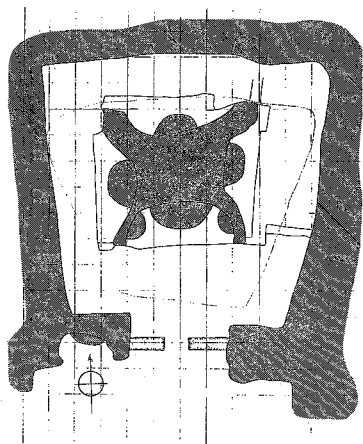
第11窟は隣接する第12窟、第13窟と同時に造営が計画された組窟であり、また雲岡石窟で最初に造営が開始された中心柱窟である。

石窟のプランは奥行10m、幅8～10m程度のほぼ方形で窟高が13mあり、中央に一辺約5mの中心柱を掘り残している(図12)。しかし第11窟は内部の基本的な粗掘りを終え、窟頂と中心柱上部の造像に取りかかった段階で造営が中断されたと考えられている⁷⁾。なお東壁の上方に太和7年(483)の紀年銘を有する龕があり、当初の計画に基づく造営はそれ以前に中止されたと推測される。

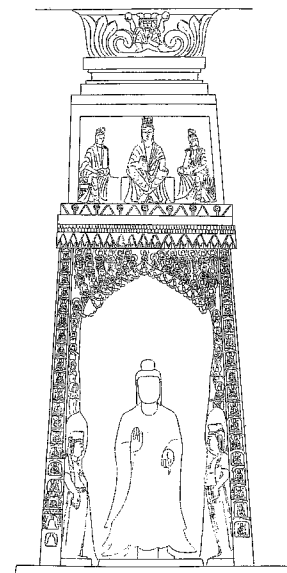
中心柱の四面は上下二層に分れており、下層には三角垂飾の下に後世に造られた高さ10m近くの如来立像がみられる。上層には北魏洛陽遷都後に造られたと考えられる菩薩交脚像や二如来立像などが彫られており、窟頂と接する最上部には大きなアカンサスと三面四臂の護法神が表されている(図13)。

第11窟の中心柱は塔形装飾の石造重層塔と同様に、最上部にはアカンサス

12



13



が表されている。さらに中心柱四面は二層に分れており、先に述べた天梯山石窟をはじめとする河西地方の中心柱窟と共通する構造といえる。このように雲岡石窟最初の中心柱窟は、西方や河西地方からの影響を示している。

②第1・2窟

続く第1窟と第2窟は雲岡石窟の東端に位置する双窟である。

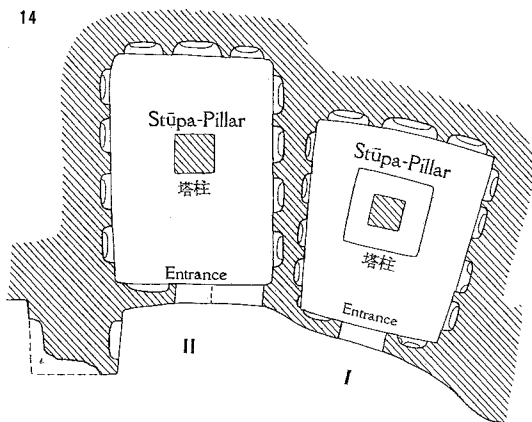
(a) 第1窟

プランは奥行約10m、幅約7mの長方形で窟高が7m程度であり、石窟のやや奥寄りに一辺が2mに満たない中心柱を掘り残している(図14)。

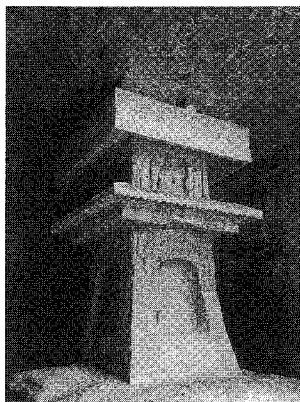
中心柱は上下二層に分れ、四面に造像が配されている(図15)。下層には瓦葺屋根や垂木のほか漢時代の画像石墓などにみられる獣形の三斗組が表されており、上層には三角垂飾の天蓋が懸かっている。

造像は下層の四面にそれぞれ如来坐像が彫られ、上層各面の主尊は南面

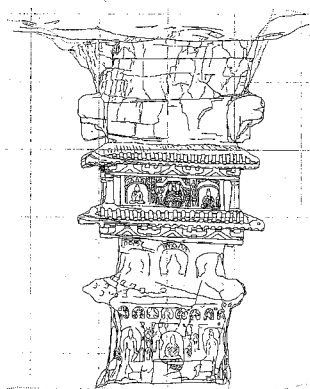
14



15



16



(正面) が如来坐像、東・西面(左・右側面)には交脚菩薩像が配され、北面(背面)は崩れている。さらに中心柱上部から窟頂にかけて、交龍の巻きつくひだ状の山岳が浮彫されている。

東・西壁は両側壁とも四龕が並び、その下に仏伝のフリーズが浮彫される。そして北壁(奥壁)には菩薩交脚像を主尊とする三尊が配されているが、いずれも壁面下半分の風化が激しく細部は不明瞭である。

(b) 第2窟

石窟形式だけでなく龕の配置などの点で第1窟と共通している。石窟のプランは奥行約10m、幅約8mの長方形で窟高は約6mであり、石窟のやや奥寄りに一辺が2mにみえない中心柱を掘り残している。

中心柱は三角垂飾の天蓋が懸かりその上部から窟頂にかけて交龍と山岳が浮彫されるほかは、第1窟と大きく異なっている(図16)。中心柱には三層の瓦葺木造塔が象られており、瓦葺屋根や柱、垂木、三斗組や人字形割束などが細かく表されている。

各層には柱間ごとに造像が配されているが、如来坐像や如来立像、菩薩交脚像だけではなく、「カンタカとの別れ」といった仏伝も表現されている。

側壁の構成は北壁(奥壁)で主尊を如来坐像とするほかは第1窟と同様であるが、風化がかなり進んでいる。

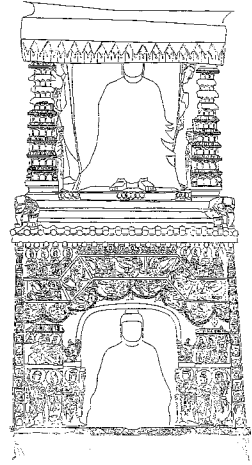
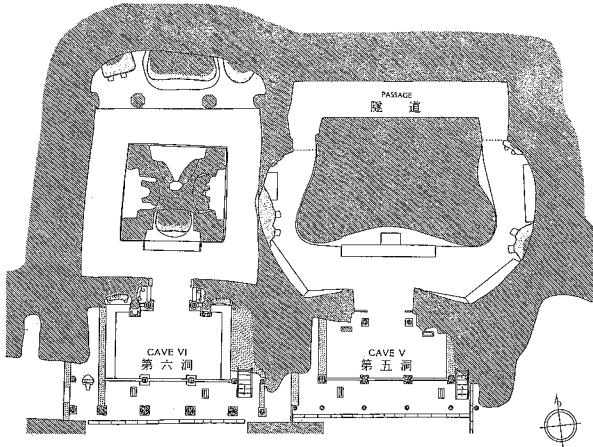
第1・2窟の塔形装飾は瓦葺木造塔と石造重層塔とが対応させて表され、瓦葺木造塔に石造重層塔の要素が付加されるという大きな変化が示されているが、ここではじめて木造塔に象られる中心柱が出現している。つまり第1窟の河西地方から伝えられた二層構造に木造建築の要素を加えた中心柱、第2窟の木造塔が象られた雲岡石窟独自の中心柱、この二つの形態が同時に現れたのである。

③第6窟

第6窟は大仏窟である第5窟との双窟であり、また細部に到るまで綿密な計画に基づいて造営され、且つその計画通りに完成をみた雲岡では稀な石窟である⁸⁾。

石窟は奥行約14m、幅約14mの方形で窟高が15mの石窟中央に、一辺7mの中心柱を掘り残している(図17)。平面プランに対して中心柱の占める比率が大きく、石窟内部はかなり窮屈な印象をあたえている。

中心柱は上下二層に分れており、下層には瓦葺屋根と垂木などが表され、上層には三角垂飾の天蓋が懸かっている(図18)。下層四面に大龕が開かれ、各面の主尊はそれぞれ南面(正面)が如来坐像、西面には如来倚坐像、北面



(背面)には二仏並坐像、そして東面には菩薩交脚像が彫られている。さらに大龕内の側面と龕外には各面あわせて16面の仏伝図が浮彫されている。そして上層四隅には象にのり、小さなストゥーパ状塔を伴う九層の木造塔が天蓋を支える柱として彫り抜かれ、中央には四方を向いた大型の如来立像四軀が配されている。

側壁は四壁とも中心柱と同レベルで上下二層に区分されており、造像も中心柱と対応して下層には如来坐像、上層には如来立像が配されている。また下層ではいくつかの龕とその下部のフリーズで仏伝を表している。

第6窟の中心柱は上下二層からなる構造の点で第1窟と一致している。しかし下層の木造建築を模した細部をみると、梁や三斗組、人字形割束などが省かれていることがわかる。また上層四隅の九層木造塔は側壁に浮彫される塔形浮彫の瓦葺木造塔とは異なり、各層には交脚像や倚坐像はまったくみられず如来坐像のみが配されている。そして上部には刹柱がなくアカンサスと半身の人物が表され、第1・2窟と同様に石造重層塔の要素が付加されている。

このように第6窟の中心柱における木造建築の表現は、側壁の塔形浮彫さらには第1・2窟の中心柱と比べるとかなり省略されている。また中心柱と側壁は上下層共に対応して造像が配されており、仏伝図は中心柱と側壁の両

方に表されている。つまり第6窟は、中心柱と側壁がほとんど同列の壁面として扱われる、第11窟、第1・2窟とはまったく異なった構成の中心柱窟といえるだろう。

④洛陽遷都後の中心柱窟

洛陽遷都後に造営されたと考えられる中心柱窟は第4窟、第5-28窟(第5-I洞)、第13-13窟(第13-B洞)、第39窟の合計4窟である。しかしながら第4窟と第13-13窟は石窟内の粗掘りを終えた段階で造営が中止し、その後に中心柱や壁面には後刻の造像がなされ、造営当初の中心柱の形態は確認できない。そのため、第5-28窟と第39窟を考察の対象とした。

(a) 第5-28窟(第5-I洞)

第4窟と第5窟の間には龍王廟溝と称される谷が延びている。第5-28窟は第5窟上方の狭い平地を、この谷に沿って50mほど進んだ地点に位置している。

石窟のプランはほぼ方形で中央に中心柱を掘り残しているが、未完成のまま造営が中止されたと考えられる。

中心柱は四面とも上下二層に区分されており、下層に木造建築の瓦葺屋根や垂木、三斗組や人字形割束などが表され、上層には天蓋が懸かっている(図19)。下層の四面はそれぞれ如来坐像が配され、上層では如来坐像のほか如来倚坐像、菩薩交脚像が彫られるが東面は無刻のまま放置されている。

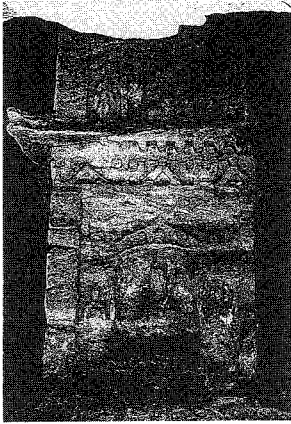
側壁の左・右壁上半部は千仏で埋められるが、そのほかの龕はやや不規則に並べられているため、現状の側壁が石窟造営当初の計画に基づくものとは考えにくい。

第5-28窟の中心柱は上下二層の構造と下層四面にみられる造像構成が第1窟の中心柱と共通しており、第1窟の影響を受けた石窟と考えられる。

(b) 第39窟

いわゆる西方諸窟のなかでも西端に位置する第39窟は、第三期諸窟として

19



20



は比較的規模の大きな石窟である。

石窟のプランはほぼ方形で窟高は6mあり、中央に中心柱を掘り残している。

中心柱は五層の木造塔が象られており、瓦葺屋根や垂木、三斗組や人字形割束などが表されている(図20)。中心柱上部から窟頂にかけては、四隅が三角形の方枠と交龍の巻きつくひだ状の山岳が浮彫されており、その東・西両側には多臂の護法神が表されている。そして中心柱各層の柱間ごとに造像が配され、如来坐像・倚坐像、菩薩交脚・半跏像などが彫られている。

側壁では東・西壁(左・右壁)と奥壁(北壁)の三壁が千仏で埋められており、後刻の小龕が彫られる南壁(前壁)も、当初は千仏を表した構成を計画していたと考えられている⁹⁾。

このように第39窟の中心柱は木造塔が象られ上部に山岳が表されており、第2窟の中心柱と共通する特徴を示している。ただし第39窟では奥壁に石窟の主尊がなく側壁が千仏で埋められ、中心柱が石窟の主要な礼拝対象となっており、石窟全体の構成はこれまでと大きく異なっている。

以上のように洛陽遷都後に造営された中心柱窟は、第1窟と第2窟それぞれの中心柱の形態を模倣する石窟が併存していたことが明らかとなった。このうち第39窟は、中心柱のみが礼拝対象となる新たな中心柱窟へと変化を示

している。

⑤雲岡石窟における中心柱窟の展開

雲岡石窟の中心柱窟において、中心柱の形態は石窟内外の壁面に彫られた瓦葺木造塔と石造重層塔の二種類の塔形装飾と密接な関係を示していた。

既に中心柱窟が出現する以前の第7・8窟、第9・10窟では二種類の塔形装飾がみられ、石窟外部に瓦葺木造塔、石窟内部に石造重層塔が浮彫されている。

続く組窟である第11・12・13窟の造営にあたり、第11窟において雲岡石窟最初の中心柱窟が出現すると共に、第12窟ではそれまで石窟外部にのみ浮彫されていた瓦葺木造塔の塔形装飾がはじめて石窟内部に表された。

そして塔形装飾の配置とその形態における大きな変化が起き、また同時に木造塔が象られた、つまり漢民族化した中心柱が出現したのが第1・2窟であった。この第1・2窟では瓦葺木造塔と石造重層塔が一对で表されると共に、さらにはこれまで石造重層塔のみに表されていたアカンサスと半身の人物が、瓦葺木造塔にも取り入れられている。

こうした塔形装飾という平面上の変化は、中心柱という立体造形の形態の変化と密接に結びつくものであった。第1窟の中心柱は河西地方から伝えられた二層構造だが、上層に石造重層塔の大きな特徴である三角文垂飾の天蓋が懸かり、下層では瓦葺屋根が表されている。そして第2窟の中心柱では三層の木造塔が象られるだけでなく、その上部には三角文垂飾の天蓋が懸けられている。つまり第1・2窟の中心柱は、どちらも二種類の塔形装飾が融合した形態を示しているのである。

また、注目されるのは両窟の中心柱上方にみられる山岳文と交龍である。これらについては後述するが、それまで外部で石窟の存在を示すランドマークのごとく表されていた瓦葺木造塔が、なぜ中心柱の形態に採用されたかについては、中心柱に山岳文と交龍といった漢民族の伝統的な図像が付加されたことと関連付けて考えるべきであろう。

そして第1窟の四面共に二層からなり木造建築の要素が加えられた中心柱、

第2窟の木造塔が象られる雲岡石窟独自の中心柱、この二つの形態はその後の中心柱窟にも採用されており、中心柱窟の造営にあたっては洛陽遷都後も両窟が重要な石窟であったと考えられる。

一方、第6窟は中心柱の木造建築表現を抑制すると共に、中心柱が側壁と同じ壁面として扱われており、第6窟ではじまり第6窟に終わった独特な構造をもつ中心柱窟であった。

なお塔形装飾と中心柱の形態の変化に限定して第1・2窟と第6窟を比較すると、両石窟には共通点が多いものの第6窟がより新しい要素を表していることがわかった。勿論、造像などを含め総合的に判断する必要があるが、これまで論じてきたことを踏まえ、第6窟は第1・2窟にやや遅れて着工されたのではないかという推論を述べておきたい。

⑥木造塔が象られる中心柱の出現とそのイメージ

それではなぜ中心柱を木造塔という漢民族の建築で表したのだろうか。中国に仏教伝来したのは遅くとも後漢時代だといわれているが、当時の寺院は木造の重層建築であったと考えられている¹⁰⁾。しかし元来このような重層建築は仏教寺院として建てられたものではなかった。たとえば後漢時代の武帝は仙人を招き、これを祭るための高層の建物を建てたとされ¹¹⁾、塔の建築に影響をあたえたものとして村田治郎氏は、「漢代における神仙思想に密接な結びつきをもつ臺の建築だった。」と述べている¹²⁾。また呉から西晋にかけて、江東地方では墓室から神亭壺と称される壺が数多く出土しているが、この神亭壺は葬送儀礼と密接な関係があり、この壺を通じて魂が昇仙すると考えられていた。興味深いことに壺の上部には周囲を回廊がめぐる重層の建築が象られており、小南一郎氏はこれについて、当時の人々にとっての塔を表現したものとしている¹³⁾。このように仏教伝来、中国の塔は神仙思想と結びついた高層の建築であった。

一方、北魏時代の人々は塔をどのように捉えていたのだろうか。雲岡石窟を造営した曇曜が訳出したとされる『付法藏因縁伝』や平城で曇靖が撰述した『雜宝藏経』などは、民衆教化のため漢民族の伝統的な思想に根づいた偽

経典である¹⁴⁾。これらの経典では塔を供養したり造立する功德により、寿命が延びたり死後には天上や天宮へいくことができると盛んに説かれている。

このように塔はそれ自体が漢民族の伝統的な昇仙思想と密接な関係をもっていた。では中心柱上部から窟頂にかけて浮彫される、交龍の巻きつくひだ状の山岳は何を表現したものだろうか。雲岡石窟にみられる山岳表現とその思想的な意義については既に八木春生氏により詳しく論じられており、これらが仏教思想に基づく須弥山だけでなく、漢民族の伝統的思想による崑崙山などの天と地を繋ぐ山を表現したものと指摘している¹⁵⁾。

つまり神仙思想と結びついていた塔のみならず、交龍の巻きつく山岳という漢民族の伝統的な図様が付加された中心柱は、いわば中心柱の漢民族化というべき形態を示しているのである。

以上のことから雲岡石窟における木造塔が象られた中心柱が出現するにあたっては、瓦葺木造塔と石造重層塔という二つの塔形装飾の変化が重要な役割を担っていたことが明らかとなった。

そして木造塔の形態が中心柱という「柱」にも採用されたわけだが、もともと木造塔は昇仙思想と密接な関係があり、さらには山岳と交龍という漢民族の伝統的な図像が付加されていた。つまりたんなる形態の変化ではなく、中心柱を漢民族化させようとする思想的な要求によって出現したと考えられるのである。

第三章 雲岡石窟の影響がみられる中心柱窟

これまで雲岡石窟に中心柱窟について述べてきたが、北魏時代に造営された石窟の中には中心柱の形態や壁面構成の上でその影響を示す中心柱窟がみられる。そこで甘粛・陝西・山西省に分布するその4窟の中心柱窟について造営年代順に、石窟の特徴と雲岡石窟との影響関係を示したい。

①甘肅省涇川県 王母宮石窟

涇川県は甘肅省東部の隴東地方にあり、長安から河西回廊を経て西域へと至る重要な交通路上に位置している。王母宮石窟は涇河と汭河の合流点にある官山のふもとに開かれた石窟で、一窟の中心柱窟のみが現存している。このほか付近には北魏永平2・3年(509・510)頃に造営された慶陽南・北石窟寺があるが、王母宮石窟の造営年代については、これらに先行する5世紀末～6世紀初頭と考えられている¹⁶⁾。

王母宮石窟のプランは現状で奥行8m、幅13m、窟高が約11mあり、石窟中央に一辺約6mの中心柱が掘り残されている(図21)。なお石窟前部は大きく崩壊し当初の前壁はまったく残らず、近代に造られた壁体で覆われている。

中心柱は上下二層からなり、下層は方形で四面にそれぞれ大龕が開かれ、龕の左右両脇には仏伝らしき物語が浮彫されるが、造像は後世に大きく改変されている(図22)。上層は中央部が八角形を呈しており、八面それぞれに龕が開かれ、さらに四隅には木造塔が象られている。なお中心柱正面(東面)は石窟前部の壁体に塗り込められており造像などは確認できない。

中心柱下層南面の大龕は二仏並坐像を主尊とし龕外向かって左(西側)には、仏伝の「諸商奉食」あるいは「諸商捧宝」の場面が浮彫されている。そして西面(背面)、北面の大龕は如来坐像を主尊とし、龕外には「婆羅門占夢」や「太子試技」、「太子象技」などが表されている。おそらく中心柱四面に合わせて八つの仏伝が浮彫されていたと考えられ、中心柱東南隅には「涅槃」が浮彫されていたというのが現在は確認できない¹⁷⁾。

中心柱上層では八角形部分の龕内にそれぞれ如来三尊像が配され、四隅には象に背負われた木造塔が象られており、瓦葺屋根などが彫られたブロック状の石が積み重ねられている。

全壊している前壁や風化の進む北壁をはじめとして側壁は保存状態が悪く、かろうじて南壁に当初の造像を確認できる程度である。南壁は中心柱と同じく上下二層からなり、下層には丸彫りの八角柱によって支えられる大龕が三龕開かれている。このうち中央の龕には如来坐像がみられ、左右の龕には如

来立像が配されていたように見える。上層には如来三尊像が配された龕が並べられ、窟頂に接する最上部には小さな如来坐像が一行浮彫されている。このほか西壁（奥壁）も南壁と同じ壁面構成であったと思われる。

以上のように、王母宮石窟は中心柱を上下二層に区分し、下層の龕外に仏伝が浮彫され、上層四隅には木造塔が象られており、さらに側壁は中心柱に対応して上下二層に龕が並べられている。このような特徴から王母宮石窟は雲岡石窟第6窟を模した石窟といえ、仏伝「太子試技」の浮彫や南壁下層の八角柱など細部においても雲岡石窟第6窟からの影響を示している。

ただし中心柱上層の中央部を八角形にする形態は雲岡石窟ではみられないものであり、王母宮石窟独自の特徴といえるだろう。また上層四隅には木造塔が象られているが、雲岡石窟第6窟のような丸彫りの柱ではなく、いわゆる石造四面塔と同様の、ブロック状の石を積み重ねた構造となっている点で大きく異なっている。

②遼寧省義県 万仏堂石窟

義県は中国東北部の遼寧省西南部に位置しており、北魏時代には平城から朝鮮半島へと至る重要な交通路上にあった。

万仏堂石窟は大凌河に沿って西区・東区の合わせて17窟が開かれている。このうち西区の第5窟には北魏太和23年(499) 營州刺史元景による造石窟題記、第6窟には景明3年(502) 韓貞等74人による造石窟題記がのこされており、万仏堂石窟が5世紀末～6世紀初頭に造営されたことが判明している¹⁸⁾。

西区第1窟は万仏堂石窟最大規模の石窟であり、唯一の中心柱窟である。石窟のプランは奥行、幅共に約8mのほぼ正方形を呈し、中央に中心柱が掘り残されている(図23)。

中心柱の四面にはそれぞれ大龕が開かれ龕内に主尊、龕外左右に脇侍立像が配されているが、四面とも後世に改変されてしまい石窟造営当初の造像を確認することが困難である(図24)。四面の大龕上部には如来三尊像と供養者が浮彫されているが、このうち南面(正面)は鹿野苑説法が表されている。

そして中心柱の最上部には三角垂飾がみられ、四隅には中程がくびれ交龍が巻きついたひだ状の山岳、その上部には単層の木造建築が表されている。

石窟には三つの門口があり、前壁は門口上部に千仏が浮彫されている。左右奥の三壁にはいずれも三つの大龕が並び石窟四隅には立像が配されるが、いずれも当初の造像はみられない。

このように万仏堂石窟西区第5窟では、中心柱と三側壁とで対応させて大龕が開かれ、四隅に木造塔ではないが山岳と単層建築が表されており、王母宮石窟ほど厳密ではないものの基本的には雲岡石窟第6窟に近い構造とすることができる。

ここで注目されるのが中心柱四隅の山岳と木造建築であり、万仏堂石窟では西区第5窟にも同様の図像がみられる。一方、雲岡石窟においても第9窟前室西南隅と第10窟前室東南隅の上部に、ひだ状の山岳にのる単層の木造建築を確認することができる(図25)。この龍が巻きつく山岳は須弥山であり、上部の建築は天宮であると考えられている¹⁹⁾。ただし西区第5窟中心柱四隅の単層建築では、雲岡石窟第6窟中心柱上層四隅の天蓋を支える瓦葺木造塔と同様に、屋根上部にはアカンサスが表されている。

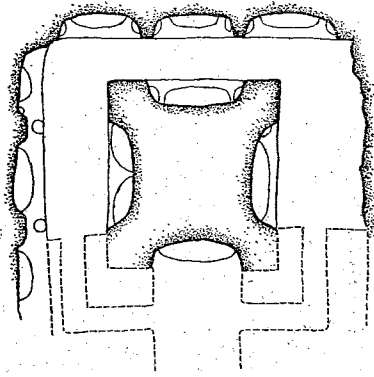
このように万仏堂石窟西区第1窟は、基本的には雲岡石窟第6窟をやや簡略化した石窟であるが、細部では第6窟に先行する第9・10窟の意匠も取り入れ、これらを複合的に表現した中心柱窟といえるだろう。

③甘肅省慶陽県 慶陽北石窟寺北一号窟

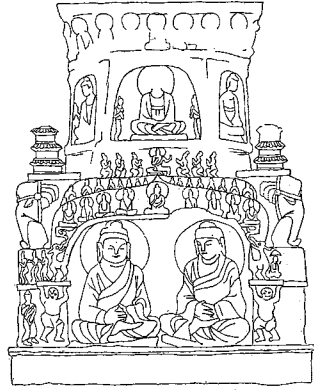
慶陽県は甘肅省東部の隴東地方に位置している。慶陽北石窟寺は蒲河に沿って開かれた比較的規模の大きな石窟であり窟龕は295を数え、涇川県の慶陽南石窟寺と共に北魏永平2・3年頃に造営が開始されたと考えられている。

楼底村一窟とも称される北一号窟は、北石窟寺の主たる石窟群から離れ蒲河を2kmほどさかのぼる地点に開かれた北石窟寺唯一の中心柱窟であり、造営時期については北魏時代末と考えられている²⁰⁾。北一号窟のプランは現状で幅5m、奥行6.5m、窟高が約5mであり、石窟中央に中心柱が掘り残されているが、石窟前部は崩壊が進んでいる(図26)。

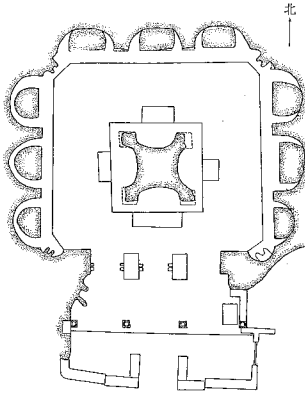
21



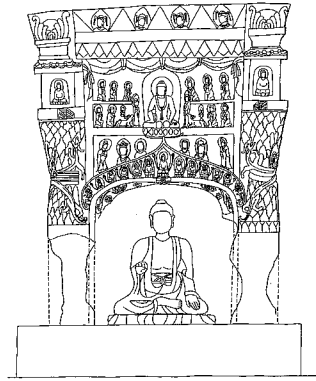
22



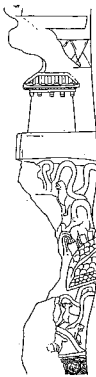
23



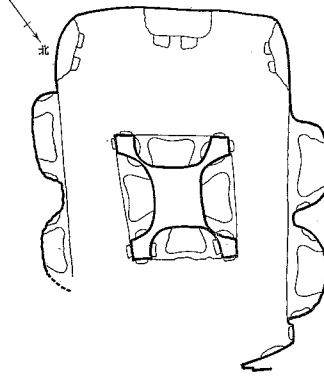
24



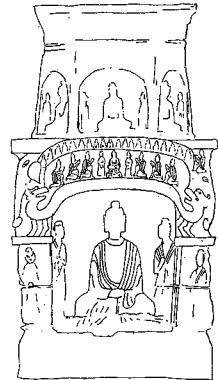
25



26



27



中心柱は上下二層に区分され、このうち下層は方形で四面にそれぞれ大龕が開かれ、上層は八角形を呈しその各面に龕を開いており、いずれの龕にも如来三尊像が配されている(図27)。下層で注目されるのが、龕楣と龕外の上方にみられる様々な浮彫である。たとえば東面(正面)下層の龕楣には菩薩半跏像と供養人が表され、龕外左側には頭を下げる馬と飛天が浮彫されている。また北面では龕外右側に象の頭部が象られ、左側には怪獣が表されている。

側壁は現存する三壁とも風化が進んでいる。南・北壁(左・右壁)は中心柱に対応するように上下二層に龕が並んでおり、下層の大龕および上層の龕にはそれぞれ如来三尊像が表されている。一方、西壁(奥壁)では像高が5m近い如来三尊立像を彫っている。

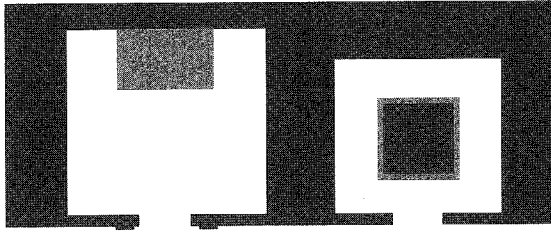
このように、北一号窟は中心柱を上下二層に区分し、左右側壁を中心柱と対応して二層に龕が並べられ、奥壁に大型の如来三尊立像が配されるなど雲岡石窟第6窟と共通する特徴を示している。その一方で中心柱上層は八角形を呈しており、中心柱の形態については王母宮石窟と同様である。以上のことから北一号窟は、雲岡石窟第6窟と王母宮石窟の両石窟から影響を受けたものと考えられるだろう。

ただし雲岡石窟第6窟と王母宮石窟の中心柱では下層龕外に仏伝が浮彫されていたが、北一号窟ではその原則がくずれ怪獣や象なども表されている。また龕楣や龕外の浮彫では、如来像や供養人の着衣全体さらには怪獣にまで多数の細やかな平行線文が刻まれている。これらは北魏時代後期を中心に、甘粛省東部から山西省東南部にかけて分布したいわゆる平行多線文造像である²¹⁾。つまり北一号窟は石窟構造において雲岡石窟第6窟や王母宮石窟の影響を示す一方、その造像には両窟と異なる様式が取り入れられている。

④ 陝西省安塞県 雲山品寺石窟

安塞県は陝西省北部のいわゆる陝北地方にあり、延安のさらに北に位置している。雲山品寺石窟は安塞県北端の鎌刀湾郷の延河に面した地点に開かれており、その造営は北魏時代末に遡ると考えられている²²⁾。このうち第2号

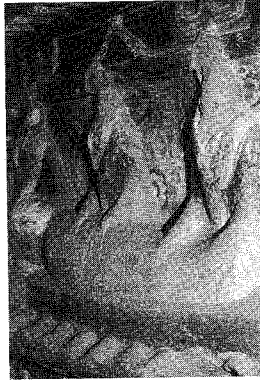
28



29



30



窟、第3号窟の規模が最も大きく、その石窟形式は第2号窟が大仏窟、そして第3号窟が中心柱窟である(図28)。

第3号窟のプランは奥行、幅共に3mほどで、窟高が約2.5mの小さな石窟であり、中央に一辺が1m弱の中心柱が掘り残されている。そのため石窟内部は人ひとりが辛うじて通行できる程度の狭さとなっている。

中心柱の四面各層には瓦葺屋根や垂木、三斗組、人字形割束斗などが表されており、中心柱全体で三層の木造塔が象られている(図29)。中心柱四面の造像は極端なまで肩が大きき特徴であるが、残念ながら頭部はすべて欠失している。いくつか注目される造像をみると、中心柱の正面では第二層が菩薩半跏像、第三層では菩薩交脚像を主尊としている。そして背面の第二層は如来坐像の前で二頭の鹿がひざまずいており、釈迦の鹿野苑説法(初転法輪)を表している。また同じく第二層の向かって右面では、頭を右に向けて横たわる人物とその背後に三人の人物が表されており、簡素ながらも涅槃の場面を表現したものと考えられる(図30)。さらに第三層の向かって左面で

は両手を胸前で拱手する坐像があり、あるいは道教像とも推測されるが後世の補修のため細部ははっきりとしない。

左右側壁と奥壁及び門口両脇の四壁すべてにわたって、上中下三列に如来坐像が配された小龕が並べられ、千仏を表した構成となっている。

以上のように雲山品寺石窟第2号窟は中心柱が木造塔に象られ四壁が千仏で構成されていることから、雲岡石窟第39窟の影響を受けて造営された石窟といえることができるだろう。

ところで隣接している第2号窟は第3号窟とほぼ同規模であり大型の如来坐像が配された大仏窟であるが、外壁の門口上には梁や三斗組が彫られ、門口左右に浮彫される塔形がこれを支える柱の役割を担っている。大仏窟であり外壁に塔形浮彫をもつことから、第2号窟は雲岡石窟第5窟に通じる構成の石窟ともいえる。さらに推測をすすめるならば雲山品寺石窟第2・3号窟が、雲岡石窟第5・6窟の石窟形式を模した双窟である可能性も否定できないであろう。

興味深いのが、第2号窟の中心柱を大きく特徴づけている涅槃の表現である。中心柱に仏伝を配することは雲岡石窟の第2窟や第6窟にもみられるが、両窟の中心柱には涅槃の場面はなく、また王母宮石窟に浮彫されていたとされる以外は、南北朝時代に造営された多くの中心柱窟をみても同様の作例は現在のところ確認することができない。ここで想起されるのが、四面に造像が刻まれたブロック状の石をいくつも積み重ねた、いわゆる石造四面塔である。石造四面塔は北魏時代後期から西魏・東魏時代を中心に、広い地域で造られたが、そのなかには涅槃の場面を表す作例が少なくない。そのため雲山品寺石窟の中心柱については雲岡石窟第39窟からの影響だけでなく、これら石造四面塔との関連についても考慮すべきだといえるだろう。

以上のように雲山品寺石窟第2号窟は雲岡石窟第39窟の影響を色濃くみせている一方、雲岡石窟と異なり中心柱に涅槃の場面が表されており、いわゆる石造四面塔との関連がうかがえる点で興味深い石窟といえる。さらにその造像は極端ななで肩の体軀であり他の地域にはみられない独自の様式を示している。

ここでは雲岡石窟の影響がみられる4窟の中心柱窟について考察したが、これらの石窟は中心柱の形態や壁面構成からみて、第6窟を模倣する石窟—王母宮石窟・万仏堂石窟・慶陽北石窟寺北一号窟、そして第39窟を模倣する石窟—雲山品寺石窟に分けることができる。このうち雲山品寺石窟は中心柱に木造塔が象られる雲岡石窟以外で唯一の中心柱窟であり、隣接する大仏窟とあわせて第5・6窟に倣った双窟の可能性も推測される興味深い石窟である。一方、数は少ないものの広い地域に分布する第6窟を模倣した中心柱窟は石窟の規模が比較的大きく、石窟形式にとらわれず雲岡石窟で最も完成度の高い石窟を模倣しようとした、という側面も否定できない。ただしいずれの石窟においても、雲岡石窟の様々な建築的要素を取捨選択し、いくつかの要素を融合させて表現しており、たんに受動的ではない受容態度を示していた。

おわりに

木造塔に象られる中心柱の出現はたんなる形態の変化にとどまるものではなく、塔そのものが漢民族の伝統的な昇仙思想と密接に結びつくものであり、さらに中心柱には天と地を繋ぐ役割も付加されていたことから、いわば中心柱の漢民族化であったといえるだろう。

一方で南北朝時代後期にはここにあげた雲岡石窟の影響を示す石窟以外にも、河南・鞏県石窟をはじめとして寧夏・須弥山石窟、河北・南北響堂山石窟など各地に中心柱窟が造営され、また河西地方においても引き続き多くの中心柱窟をみることができる。しかしながら中心柱四面が層状に区分される石窟は次第に減少し、四面それぞれに一龕が開かれる形態が多くなり、さらには中心柱正面にのみ龕が開かれる石窟も現れている。

つまり中心柱を木造塔に象ることは、雲岡石窟においてははじまり、わずかに周辺の小石窟にのみ影響を与えただけの特異なものであり、雲岡石窟における漢民族化した中心柱のイメージはその後の中心柱窟に伝播することはなかったと考えられる。

中心柱は石窟の造営当初に計画されなければ存在し得ないものであり、石窟の造営思想を反映すると考えられる。この小論では建築表現のみに着目したが、今後は造像をはじめとして石窟を構成する様々な要素をも捉え、各地の中心柱窟がもつ思想的な相違について多角的な考察をすすめたい。

注

- 1) 雲岡石窟の造営年代については次の論考を参照した。
水野清一・長廣敏雄「雲岡造営次第」『雲岡石窟』第16巻 京都大学人文科学研究所 1956
長廣敏雄『中国文化史蹟 雲岡石窟』世界文化社 1976
宿白「雲岡石窟分期試論」『考古学報』1978-1
宿白「雲岡石窟における国力の集中と〈雲岡様式〉の形成と発展」『中国石窟 雲岡石窟一』平凡社 1989
八木春生『雲岡石窟文様論』法蔵館 2000
- 2) 拙稿「中国南北朝時代の敦煌莫高窟における中心柱窟の展開」『成城文藝』第162号 1989
- 3) 宿白「涼州石窟遺迹和“涼州模式”」『考古学報』1986-4
- 4) 長廣敏雄『大同石窟芸術論』高桐書院 1946
- 5) アカンサス (Acanthus) は、キツネノマゴ科ハアザミ属の多年草である。(牧野富太郎『原色植物大図鑑 続編』北隆館 1987)
- 6) 前掲『大同石窟芸術論』106頁
- 7) 水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第8・9巻 1953
- 8) 第5・6窟については、前掲、八木春生『雲岡石窟文様論』第六章「雲岡石窟第五および六窟についての一考察」において、細部の意匠にいたる総合的な論究がなされている。
- 9) 水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第15巻 1955
- 10) 田中豊蔵「支那に於ける佛寺の原始形式」『美術研究』第16号 1933
- 11) 『史記』巻28「封禪書」中華書局 1982
- 12) 村田治郎「佛舍利をまつる建築」『佛教藝術』第38号 1959
- 13) 小南一郎「神亭壺と東呉の文化」『東方學報』65冊 1993
- 14) 元魏吉迦夜共曇曜訳『付法蔵因縁伝』(『大正新脩大蔵経』第50巻 1927)
元魏吉迦夜共曇曜訳『雜宝蔵経』(『大正新脩大蔵経』第4巻 1924)
北魏時代の平城における仏教については、塚本善隆『支那佛教史研究 北魏篇』(弘文堂 1942)を参照した。
- 15) 前掲 八木春生『雲岡石窟文様論』第五章「雲岡石窟の山岳文様について」

- 16) 王母宮石窟については次の論考を参照した。
 陳万里『西行日記』北京大学研究所国學門実地調査報告 1926
 『甘肅泾川王母宮石窟調査報告』『考古』1984-7
 『隴東石窟』文物出版社 1987
- 17) 水野清一・長廣敏雄「中国における石窟寺院」『雲岡石窟』第15巻 1955
- 18) 劉建華『義県万仏堂石窟』少林文化研究叢書 科学出版社 2001
- 19) 水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第6巻 京都大学人文科学研究所 1951
- 20) 『慶陽北石窟寺』文物出版社 1985
- 21) 平行多線文造像については、拙稿「中国南北朝時代の「鄭県（富県）様式」仏教・道教造像に関する再検討—平行多線文をあらわす造像について—」（『鹿島美術研究』年報第18号別冊 2001）を参照されたい。
- 22) 「陝北発現一批北朝石窟和磨崖造像」『文物』1989-4

図 版

- 1 雲岡石窟第2窟東壁塔形裝飾 水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』第1巻 第28図
b
- 2 雲岡石窟第7窟東壁塔形裝飾 『雲岡石窟』第1巻 第28図 f
- 3 雲岡石窟第7窟門口塔形裝飾 『雲岡石窟』第4巻 PLAN VI
- 4 雲岡石窟第9窟前室西壁屋形龕 『雲岡石窟』第7巻 PLAN VII
- 5 雲岡石窟第2窟東壁 『雲岡石窟』第1巻 PLAN XI
- 6 雲岡石窟第1窟西壁 『雲岡石窟』第1巻 PLAN V
- 7 雲岡石窟第5・6窟外壁西側塔形（部分） 『雲岡石窟』第3巻 第3図
- 8 雲岡石窟第6窟側壁塔形裝飾 『雲岡石窟』第1巻 第28図
- 9 仏伝浮彫（ラホール博物館蔵） 栗田功『ガンダーラ美術 I』二玄社 1988 図
365
- 10 仏伝浮彫 『ガンダーラ美術 I』図273
- 11 石造柱頭（スワット博物館蔵） 栗田功『ガンダーラ美術 II』二玄社 1990 図
638
- 12 雲岡石窟第11窟平面図 『雲岡石窟』第巻 PLAN I
- 13 雲岡石窟第11窟中心柱南面 『雲岡石窟』第8・9巻 第14図 a
- 14 雲岡石窟第1・2窟平面図 『雲岡石窟』第1巻 第9図
- 15 雲岡石窟第1窟中心柱南面 『中国石窟 雲岡石窟一』平凡社 1989 図5
- 16 雲岡石窟第2窟中心柱北面 『雲岡石窟』第1巻 PLAN XIV
- 17 雲岡石窟第5・6窟平面図 『雲岡石窟』第2巻 第11図
- 18 雲岡石窟第6窟中心柱南面 『雲岡石窟』第3巻 PLAN VI
- 19 雲岡石窟第5-28窟中心柱正面
- 20 雲岡石窟第39窟中心柱南面 『雲岡石窟』第15巻 PLATE91

- 21 王母宮石窟平面図 『隴東石窟』 9頁
- 22 王母宮石窟中心柱南面 『隴東石窟』 10頁
- 23 万仏堂石窟西区第1窟平面図 劉建華 『義県万仏堂石窟』 図九
- 24 万仏堂石窟西区第1窟中心柱南面（正面） 『義県万仏堂石窟』 図一五
- 25 雲岡石窟 第9窟前室西南隅天宮 『雲岡石窟』 第6卷 PLAN V
- 26 慶陽北石窟寺北一号窟平面図 『慶陽北石窟寺』 図25
- 27 慶陽北石窟寺北一号窟中心柱西面（正面） 『隴東石窟』 4頁
- 28 雲山品寺石窟第2・3号窟平面図
- 29 雲山品寺石窟第3号窟中心柱正面
- 30 雲山品寺石窟第3号窟中心柱側面第2層